

ICU在学生の職業的価値観の比較研究

—— 20年前との比較 ——

笛田 理恵子

石塚 正一

原 一雄

はじめに

国際基督教大学（ICU）においては、1961年以来5年間継続して、社会科学科一般教育科目の一コースとして「SSV－大学生の価値観研究」が開講され、大学生の価値意識を様々な側面から明らかにする試みがなされた。丁度、その実施期間中に生まれた学生が、今、ICUで学んでいる。そこで、当時と比較して、現在の学生の価値観がどのように変わってきているのかを明らかにすることが、本論文ならびに次に掲載される二篇の研究論文の目的である。

目 的

本研究では、価値観のなかでも特に職業選択時にはたらく職業的価値意識を取り上げ、以下の5点について考察を試みる。

- 1) 1983年度に在席するICU生の職業的価値観はどのような特徴をもつものであろうか。
- 2) 幾つかの下位集団（性、学年、専攻別）の間に、この職業的価値観について何らかの差異が見出されるかどうか。
- 3) 20年前にICUで得られたデータと比較して、この職業的価値観に何らかの差異が見出されるかどうか。
- 4) 現在（1983年度）のICU生の職業的価値観の因子構造は、どのようなものか。

- 5) 上記4) で得られた因子構造は20年前の調査から得られた因子構造と比較して、何らかの変化を示しているかどうか。

方 法

1. 被調査者

本学教養学部1983年度入学者、男子73名、女子130名、計203名、ならびに1983年度第4学年在学者、男子31名、女子88名、計119名による調査結果を基礎資料とし、その他に1963年度入学者、男子117名、女子111名による調査結果を比較のための資料として用いた。

2. 調査用紙

1950年と1952年にCornell大学において行なわれたCornell Value Studyの際に、Rosenberg, M.は社会的価値と職業選択の研究を担当した。その時、彼により作成された職業的価値質問紙（Occupational Value Inventory）は、本学において行なわれた「価値観研究」の際に邦訳されて用いられ、Cornell大学での調査結果との比較検討がなされた。

Rosenbergによる職業的価値質問紙は、以下に記す10の職業的価値を示す項目から成り立っている。

- a. 能力や適性を生かすことができる。
- b. 十分な収入が得られる。
- c. 独創的もしくは創造的な活動ができる。
- d. 社会的な地位や名声が得られる。
- e. 物ではなく、人と一緒に働くことができる。
- f. 安定した変動のない将来が約束される。
- g. 他人の監督から比較的自由である。
- h. 指導者的な手腕をふるうことができる。
- i. 新奇なことや冒険的な経験ができる。
- j. 他人のために助力する機会がある。

Rosenbergによれば、人々が職業選択時に考慮する職業的価値意識は、1) 自己表現志向的 (self-expression oriented), 2) 外来的報酬志向的 (extrinsic reward oriented), 3) 他人志向的 (people oriented) の3つの価値複合体に分類され、1) が a と c, 2) が b と d, 3) が e と j の項目によって代表されるという。原 (1968) の本学における調査の因子分析によっても、Rosenbergの如く3つの因子が抽出され、またそれらが彼のいう3つの価値志向を代表したものと推定されたことなどから、Rosenbergの3つの職業的価値志向は、日本人大学生にも適用するものであることが認められている。

3. 調査方法

調査用紙は、入学者に対しては入学式後のオリエンテーション期間中に、第4学年在籍者に対しては5月下旬に、ともに全員にあてて配布され、約1カ月の後に回収された。

本調査においては、10項目それぞれの職業的価値を「重要さの程度」を表わす7段階尺度を用いて各被調査者に評定させ、さらにまた、それらの職業的価値を、「重要さの程度」に従って、1位から10位まで順位づけさせた。同時に、1966年に本学で施行した調査方法 (原, 1968) に従い、個人の価値判断の他に、「社会一般の人々がどのように考えていると思うか」という、本人が認知している他人の価値判断についても、評定および順位づけをさせた。

4. 評価方法

以上の方法で集められた資料は、ICU計算センターの電子計算機によって処理され、評定値については平均と標準偏差を、順位については中央値が、全被調査者および下位集団ごとに求められた。また、下位集団間の平均の差の有意性がt検定によって検討された。さらに、今回の調査で得られた職業的価値観の因子構造を20年前のものと比較するために、項目間の相関行列を基に因子分析を施行し、主要な3因子について、バリマックス回転後の因子

負荷量を求めた。

結果および考察

A. 全体的傾向

入学者402名中の203名（50.5%）、第4学年在籍者399名からは119名（29.8%）の回答が得られた。

10項目の職業的価値それぞれに対して、被調査者が評定した自分自身（自己）にとっての好ましさ、被調査者が考えた世間一般の人々（他者）の好ましさ、ならびに、両者の間の相違を明らかにするために、各項目に対する評定値の平均と標準偏差を自、他の評価別に表わし、それらの間のt検定による平均の差の有意性および相関係数を示したのが表1および図1である。表1から、被調査者の自己評価と他者評価の評定の間には、 $r = -.76 \sim -.59$ という、かなり強い負の相関がみられ、竹上（1963）、原（1968）によりすでに指摘されていた自己評価と他者評価との間にある葛藤が、ここでも明らかに見出された。

表1 1983年度被験者全員の自・他評価別平均評定値間の
検定および相関係数

項目	自己評価		他者評価		t	p	r	p
	平均	S. D.	平均	S. D.				
a.	6.57	0.66	5.89	0.95	.536	ns	-.59	< .01
b.	5.33	1.11	6.47	0.75	.836	ns	-.70	< .01
c.	5.37	1.05	4.44	1.26	.612	ns	-.74	< .01
d.	3.67	1.43	5.83	1.07	1.366	ns	-.68	< .01
e.	4.89	1.44	3.88	1.27	.614	ns	-.76	< .01
f.	3.97	1.49	6.29	0.88	1.507	ns	-.67	< .01
g.	4.59	1.27	3.98	1.28	.382	ns	-.68	< .01
h.	3.44	1.45	4.57	1.30	.681	ns	-.65	< .01
i.	4.38	1.46	3.11	1.30	.764	ns	-.73	< .01
j.	4.94	1.38	3.39	1.40	.930	ns	-.70	< .01

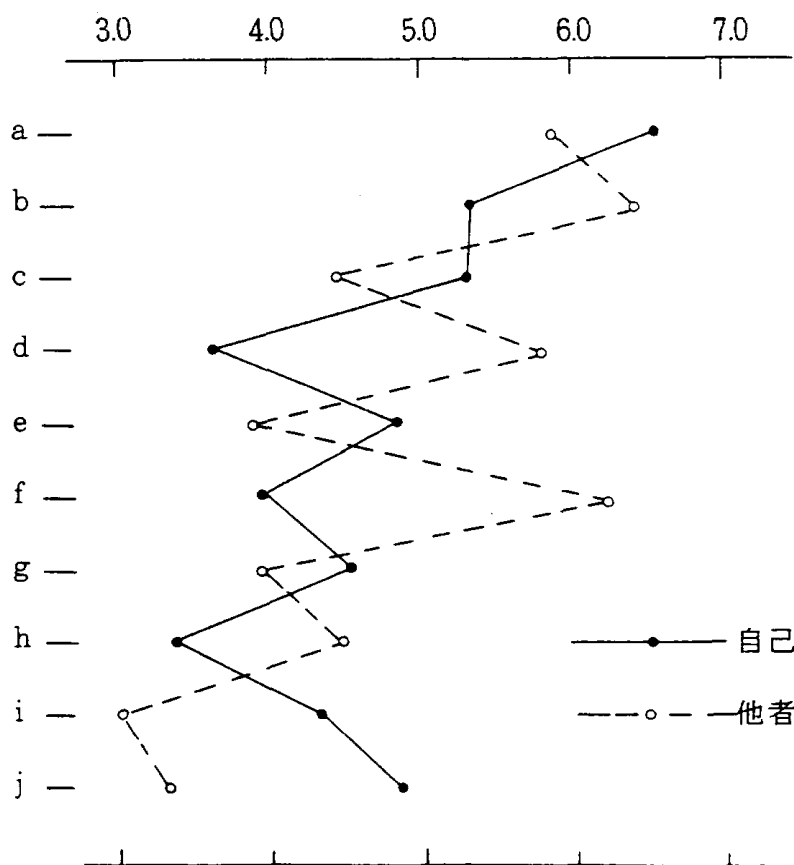


図 1. 職業的価値平均評定値：「自己」と「他者」との比較

B. 下位集団間での比較

本調査の被調査者を、学年別、性別、専攻学科別に分け、それぞれが各項に与えた評定値の平均の差を t 検定で検証したところ、次のような結果が得られた。

①性差

図 2 に示されるとおり、男女間で職業的価値に与える評定値の平均を比較すると、自己評価（図 2 - 1）では、「C. 創造的」および「h. 指導的」で、男子学生の方が女子学生よりも統計的に有意に高い評価を示している。

なお、図には示されていないが、各学年別に検討すると、1年生では「a. 能力」において、女子の方が男子よりも高い自己評価を与えているのに対し、「c. 創造的」「i. 経験」および「h. 指導的」に関しては、男子の方が

女子よりも高い自己評価を与えていた。しかしながら、4年生では男女間で有意な差がひとつもみられなかった。一方、他者評価では、1年生の「h. 指導的」に関する項目にのみ、女子の方が男子よりも有意に高い評価を下し

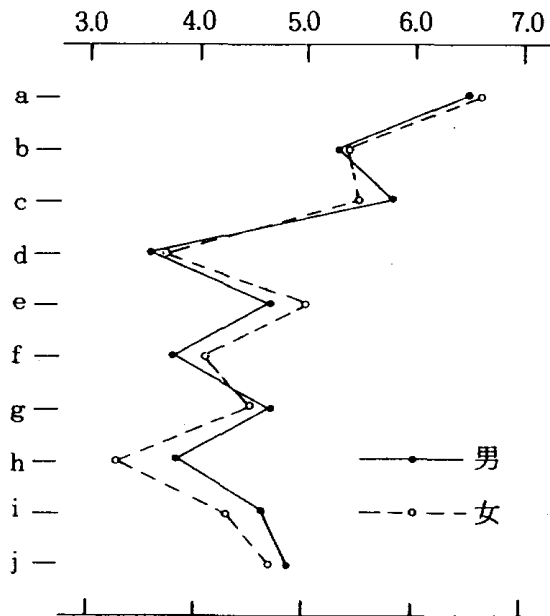


図2-1. 「自己」の職業的価値
平均評定値：男女の比較

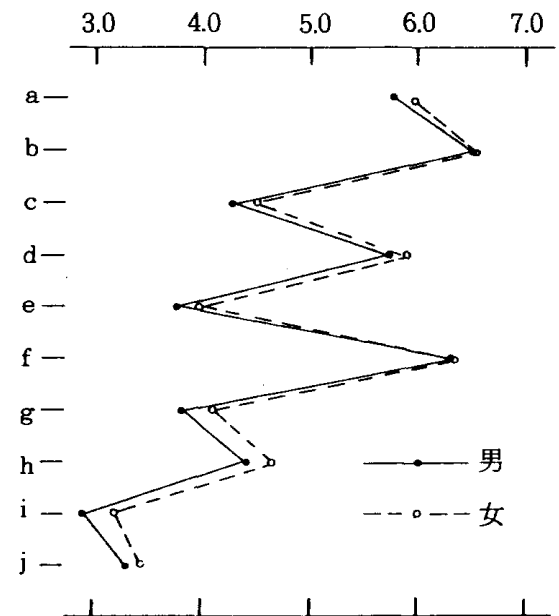


図2-2. 「他者」の職業的価値
平均評定値：男女の比較

ていた。その他の項目や学年には男女間で有意な差は全く認められなかった。

②学年別

職業的価値に対する好ましさを、学年別に比較すると、図3-1より「b. 収入」「e. 人と働く」および「f. 安定」の3項目に対し、4年生の方が1年生より高い価値をおいている。また、図3-2の他者評価の面では、「c. 創造的」「j. 助力」「i. 経験」の3項目で、4年生の方が1年生よりも、世間一般の人々が有意に高く評価していると考えている。

学年間の職業的価値に対する好ましさの差を、男女別に分類して比べてみると、図には示されていないが、女子学生の自己評価では、「b. 収入」と「e. 人と働く」の2項目で、4年生の方が1年生よりも有意に高い評価を与えている。他者評価では、男子の4年生が「a. 能力」「c. 創造的」および「f. 助力」の3項目で、同じく男子の1年生よりも、世間一般の人々

の評価を高くみており、女子の他者評価でも、「c.創造的」「i.経験」および「f.助力」の3項目について、1年生よりも4年生の方が高く評価していた。

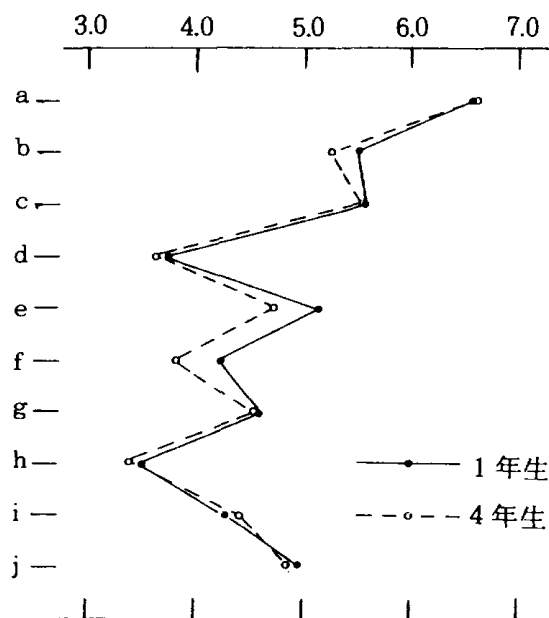


図3-1. 「自己」の職業的価値
平均評定値：学年の比較

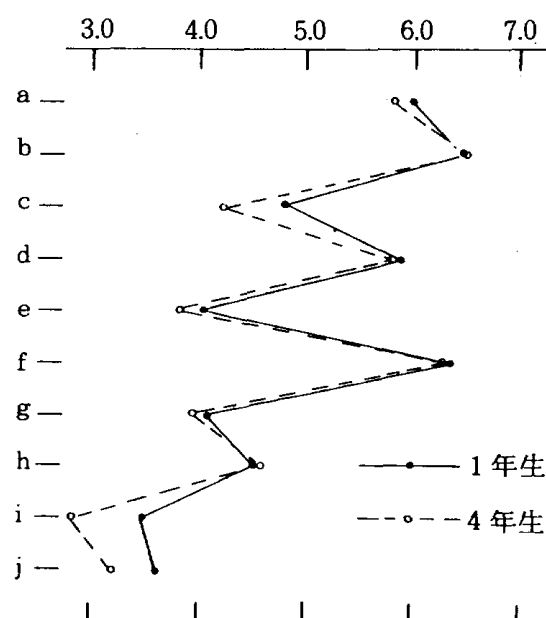


図3-2. 「他者」の職業的価値
平均評定値：学年の比較

③専攻学科間

表2に示される通り、学年ごとに専攻学科間における平均評定値の順位相関係数を求めたところ、.63~1.00の相関を示した。この表から、1年生では専攻学科間に順位づけの差異がほとんど認められなかったのに対し、4年生では、自然科学科が他学科とはかなり違った反応パターンを示すことが推測できる。

表2 専攻学科間の順位相関係数（学年別）

a. 1年生

自 己 評 価

		H	SS	NS	L	E
他 者 評 価	H		.952	.964	.915	.964
	SS	.997		.921	.915	.976
	NS	.982	.973		.921	.933
	L	.961	.964	.936		.878
	E	.973	.976	.967	.976	

b. 4年生

		自 己 評 価				
		H	SS	NS	L	E
他 者 評 価	H					
	SS	.955		.630	.915	.976
	NS	.900	.939		.600	.593
	L	.948	.927	.830		.891
	E	.985	1.000	.939	.927	

各職業的価値に対する平均評定値を、学年別に専攻学科間でt検定を行ない、有意な差の有無を検証したところ、表3が得られた。専攻学科間に有意な差のみられたのは、自己評価の面のみで、他者評価においては、有意な差は全く認められなかった。

表3 職業的価値観の専攻学科間比較（学年別、自己評価）

1年生

H > SS, NS, L (c. 創造性)

E > H, NS, L (j. 助力)

L < H, NS, L, E (e. 人と働く)

4年生

NS < SS, L, E (e. 人と働く)

NS > H (h. 指導的)

C. 従来 of 調査結果との比較

かつて、ICUにおいて施行された職業的価値調査の結果と今回の調査結果を比較し、それらの間の順位相関係数を算出したものを表4に示した。この表から、男子学生の順位が従来 of 調査結果と大きく変化してきたことがわかる。中でも特に目立って順位の変動がみられたのは、前回3位にあげられ、今回6位ないし7位にまで下がった「g. 監督からの自由」の項目であった。

D. 因子分析

① 下位集団間の比較

質問紙中の職業的価値10項目相互の相関係数を学年と男女によって分けた

表4 評定値の順位の入學年度別比較

	1 年 生		(男 子)		(女 子)	
	'63	'83	'63	'83	'63	'83
a.	1	1	1	1	1	1
b.	4	3	4	3	4	3
c.	2	2	2	2	2	2
d.	10	9	10	10	10	9
e.	6	5	5	6	7	5
f.	8	8	8	9	8	8
g.	3	6	3	7	5	6
h.	9	10	9	8	9	10
i.	7	7	6	4	6	7
j.	5	4	7	5	3	4
順位相関係数	.915		.830		.939	

4群について求め、それらの相関マトリックスを用いて因子分析を行なった結果、それぞれから3つの主要因子を抽出することができた。それを各項目ごとに示したのが表5、a-dである。

ここには、4年生男子を除く全ての下位集団に、Rosenbergのいう3つの価値志向に相当する因子が表われている。

これらの負荷量を学年および男女間で比較すると、1年生の男子では「h. 指導的」と「i. 経験」が他人志向と結びつけられ、女子では自己表現志向と関連づけて考えられている。また、4年生の男子にとって、「a. 能力」「c. 創造的」「h. 指導的」「i. 経験」に代表される自己表現志向は、「b. 収入」「d. 地位」「f. 安定」に代表される外来的報酬志向と一緒に複合体として考えられており、Rosenbergのいうような別個の独立した価値体系としては現れていない。また、4年生の男子にとって「b. 収入」は全ての因子に対して高い負荷量をもつ項目であり、「e. 人と働く」「j. 助力」に代表される他人志向因子との間には特に高い負の負荷量をもっている。一方、4年生の女子では他人志向が「e. 人と働く」「j. 助力」と「g. 監督からの自由」に代表される負の価値志向の複合体から形成されている。

②従来の結果との比較

ICUで行なわれた従来 of 調査の因子分析結果は表 6 a - b のとおりである。これを今回の調査結果と比較してみたところ、次のような差違が見出された。

1年生の男子では、かつては「g.監督からの自由」を自己表現志向と、また「h.指導的」を外来的報酬志向と結びつけて考えていたのに対し、今回の調査では、むしろ他人志向と強く結びつけられている。

1年生の女子では、かつて「a.能力」が自己表現志向として考えられていたのに対し、今回は他人志向に負の負荷量をもつものとして考えられ、以前は「g.監督からの自由」「h.指導的」および「i.経験」が他人志向と結びついていたのが、今回の調査では自己表現志向と結びつけられていることがわかった。

全般的考察

本調査の結果から1983年度に在籍するICU生全員の職業的価値観を推測することは難しい。したがって、以下に述べる事柄は、対照をあくまでも本調査に回答をよせた1年生および4年生の標本に限った場合における全体像である。

さて、1983年度のICU生の職業的価値観は、以下の点で特徴づけられる。

被調査自身の職業的価値に対する評価では、順位の高い方から「能力」「創造的」「収入」の順に並び、最も重視されなかったのは、「指導的」である。過去と比較して、他人依存性が増し、冒険的で自由な職業よりも決められた範囲内での自己実現を求め、収入や地位を得ようとするのが、現在のICU生の職業観である。その傾向は、1年生女子と4年生男子に強く、1年生男子は比較的、新奇的経験を求め、4年生女子は「創造的」よりも「収入」を重視する傾向にある。

専攻別に比較したとき、学年によって異なった特徴が見い出された。1年生では人文科学科の学生が「創造的」に、教育学科の学生が「助力」に高い

表5 職業的価値の3因子に対する因子負荷量

a. 1年生 男子

	I	II	III	h^2
a.	.148	-.165	.451	.253
b.	.858	-.027	.128	.753
c.	-.128	.554	.124	.338
d.	.618	.162	.110	.421
e.	.135	-.067	.364	.155
f.	.579	.305	.025	.429
g.	.135	.043	-.459	.231
h.	.219	.544	.651	.769
i.	.037	.824	-.380	.825
j.	.110	.165	.192	.076

b. 1年生 女子

	I	II	III	h^2
a.	.131	-.039	-.140	.038
b.	.734	-.019	-.132	.557
c.	-.134	.387	.116	.187
d.	.520	.260	-.037	.340
e.	.193	.065	.838	.745
f.	.638	-.197	.004	.446
g.	.061	.547	-.227	.354
h.	.324	.515	.126	.386
i.	-.079	.602	.113	.380
j.	-.155	.088	.406	.189

c. 4年生 男子

	I	II	III	h^2
a.	.265	.016	.009	.071
b.	.490	-.534	.476	.751
c.	.500	.103	-.129	.277
d.	.821	-.066	.047	.681
e.	.046	.370	.315	.238
f.	.861	.058	.170	.773
g.	-.055	.009	.506	.259
h.	.535	.120	-.142	.320
i.	.604	.138	.062	.392
j.	.359	.924	-.045	.985

d. 4年生 女子

	I	II	III	h^2
a.	.213	.423	-.114	.237
b.	.611	-.001	.366	.507
c.	-.362	.740	.123	.694
d.	.533	.184	.386	.468
e.	-.055	-.050	-.258	.072
f.	.633	.019	-.123	.416
g.	.106	.149	.466	.250
h.	.365	.397	.158	.316
i.	.074	.527	.149	.306
j.	.078	.094	-.745	.569

表6 1963年度入学者の職業的価値3因子に対する因子負荷量

a. 1年生 男子

	I	II	III	h^2
a.	-.038	.127	.366	.151
b.	.036	.788	-.141	.642
c.	.679	-.150	-.056	.486
d.	.220	.792	.188	.710
e.	-.006	.231	.782	.666
f.	-.290	.690	.222	.609
g.	.569	.133	-.005	.341
h.	.448	.627	.158	.620
i.	.766	.116	.055	.603
j.	.106	-.307	.782	.717

b. 1年生 女子

	I	II	III	h^2
a.	-.114	-.017	.889	.803
b.	-.119	.868	.076	.773
c.	.383	-.028	.710	.652
d.	.232	.793	-.194	.721
e.	.750	.019	.103	.573
f.	.127	.833	.031	.710
g.	.820	.220	.031	.722
h.	.574	.464	-.138	.564
i.	.870	.100	-.031	.769
j.	.511	-.094	.282	.350

評価を下し、語学科の学生が「人と働く」ことを低く評価している。また、自然科学科の4年生も「人と働く」ことを好まず、人文科学科の学生と比較して、明らかに「指導的」に高い価値をおいている。

被調査者の認知する世間一般の人々の職業的価値評価は、高いものから順に「収入」「安定」「能力」「地位」「指導的」となっており、「経験」「助力」「人と働く」などは低い評価しか受けていないと考えられている。指導的で、他人に依存せず、独力で報酬を獲得しようとするこの職業観は、現実のICU生の職業観とは大きくかけはなれていることが明らかにされた。また、この職業的価値の自己評価と他者評価の葛藤は、先行研究（竹上，1963；原，1968）においても指摘されたところであった。

職業価値の因子構造を学年および男女別に求めてみたところ、本年度の4年生に特徴的な傾向が幾つか見い出された。

4年生男子では、「収入」「地位」などの外来的報酬志向と「能力」「創造性」などの自己表現志向が一つの因子を形成しており、その他に他人志向と、更にもう一つの新しい因子が抽出された。最初の因子からは世間一般で求められている職業観に自分自身も近づけようとするものとする職業観が、第2因子からは収入にはあまり関心をもたず、他人の為に奉仕的な仕事をしたいと希う職業観が、そして第3因子からは他人に使われずに自力で収入を得たいとする職業観が読みとれる。

また、4年生女子にとって、他人志向は人を援助したり、人と働くことによって喜びをえるというよりは、人に使われずに自分の力で仕事をしたいという負の他人志向を示唆するものであった。

以上の結果から、20年間におけるICU生の価値志向の変化が明らかにされ、社会一般の価値観の時代的推移につれて本学の教育理念の実践がますます困難に遭遇すると共に、その意義が一層深められてきたことを痛感させられるのである。

参考文献

1. 原 一雄 「大学生の職業的価値観」教育研究, 1968, 13, 108-131
2. Rosenberg. M. Occupations and Values. Free Press. 1957.
3. 竹上 秋彦 「大学生の職業価値観」未発表学士論文, 国際基督教大学, 1963.

**A STUDY OF THE VOCATIONAL VALUES
OF ICU STUDENTS
—A COMPARISON WITH STUDENTS IN 20 YEARS AGO—**

Rieko Fueda
Masakazu Ishizuka
Kazuo Hara

In International Christian University (ICU), a general education course of social sciences entitled “A study of students’ value” had been offered since 1961 until 1966. This report and following two articles are the product of a study which aims to compare the values of ICU students today with those of the past.

Rosenberg, M. had charge of investigating the social values and vocational choice in Cornell Value Study which was conducted in 1950 and 1952 at Cornell University. The Rosenberg’s Occupational Value Inventory was thus used for the value study of ICU students in both occasions.

The Inventory is composed of following 10 items.

- a. “Provide me an opportunity to use my special abilities or aptitudes” (*“Abilities”*)
- b. “Provide me with a chance to earn a good deal of money” (*“Money”*)
- c. “Permit me to be creative and original” (*“Creative”*)
- d. “Give me social status and prestige” (*“Status”*)
- e. “Give me an opportunity to work with people rather than things” (*“Work with people”*)

- f. "Enable me to look forward to a stable, secure future"
(**"Security"**)
- g. "Leave me relatively free of supervision by others"(**"Freedom"**)
- h. "Give me a chance to exercise leadership" (**"Leadership"**)
- i. "Provide me with adventure" (**"New experience"**)
- j. "Give me an opportunity to be helpful to others" (**"Helpful"**)

According to Rosenberg (1957), vocational values which one considers when he chooses his occupation are classified into 3 value complexes; 1) *self-expression* oriented, 2) *extrinsic reward* oriented and 3) *people* oriented. These complexes were also found in the factor analysis of ICU students' data, which was confirmed that they may also hold of Japanese students.

Data for this report were basically obtained from freshmen and seniors in 1983, and they were divided into several sub-groups by sex, class and division. The results were also compared with those of freshmen in 1963.

In this study Ss were asked to rate 10 items of vocational values by using a seven-stage scale and to rank them from the 1st to the 10th places as their preference (*Self*). At the same time they were also requested to rate and to rank them as they thought that society in general would evaluate them (*Others*).

All of these data were put into the IBM computer of ICU Computer Center. The outputs were means and standard deviations of rating data, medians of ranking data, correlation coefficients and varimax rotated factor matrixes for all Ss and for each sub-group. The differences between sub-groups were examined by t-test.

The following results were obtained through statistical analysis.

1. Conflicts between "*Self*" and "*Others*" were found. There were fairly strong negative correlation coefficients between *self*-evaluation

and *others*-evaluation. ($r = -.761 \sim -.587$)

2. The occupational values which were highly respected by ICU students in 1983 were "*Abilities*", "*Creative*" and "*Money*". The least respected value was "*Leadership*". Compared to 20 years ago, they became less adventurous.
3. Comparing between sexes and classes, it was found that male freshmen want "*New experience*" and female seniors tend to respect "*Money*" more than "*Creative*". Comparing between divisions, several different characteristics were found between classes.
4. The rating order of the occupational values as others-evaluation was "*Money*", "*Security*", "*Abilities*", "*Status*" and "*Leadership*" from the highest. "*New experience*", "*Helpful*" and "*Work with people*" were thought to be evaluated low by people in general. It showed great contrast with ICU students' vocational values of their own.
5. Through factor analysis of ICU students in 1983 it was found that male seniors did not reflect Rosenberg's 3 value complexes. *Extrinsic reward* oriented and *self-expression* oriented value complexes made one complex, and *people* oriented and one more complex were found. The 3 factors of other groups were fairly similar to Rosenberg's 3 value complexes and those of 20 years ago.